

目次

- ◆ 巻頭言
…森本忠紀
- ◆ 私の京都・大阪物語
(5)
…重信房子
- ◆ 自給自足の山里から
…大森昌也
- ◆ 面会記
…平良
- ◆ パレスチナと世界の
現在(2)
重信メイインタビュー
- ◆ 短歌で遊ぼう

「さわさわ」の旗ができました

森本忠紀

正確に言えば、今、作って貰ってるところです。「さわさわ」4号の巻頭の言葉で、田川さんが「さわさわ」の旗を作ろうと呼びかけました。いち早く応えた重信さんによるデザイン原画ができ、会員の皆さん多くの方々からカンパを寄せていただき、いよいよ旗を注文しようということになりました。京都四条に、創業120年を誇る、京都一の老舗の旗屋さんがあり、「同志社の自治会の旗はいつもそこで作って貰ったんや、旗を作るならそこ」と田川さん。そこで、先日、二人で出向き注文してまいりました。この、「さわさわ」5号を手に取り、読んでいただく頃には、青地に白抜きの素敵な旗が、できあがっていることと思います。

その後、何日か経って私は、奈良市、西の京にある、重度身障者の施設に招かれて行ってきました。この日は、施設の秋祭りで、年に一度、離れて暮らしている、お母さんたちと一緒に、一日を過ごすのです。その余興に私が呼ばれて、沖縄民謡を聞いてもらいました。この祭りには、去年、初めて呼んでいただき、忘れられない、強い印象を受けました。重度身障者のみなさん（車椅子に座れずに、床に横たわる人も何人もおられます。）、横に寄り添うお母さんたち、職員の皆さん方…、みんな心をつなげて、場をつくっておられます。今、共に生きてあるこの時を大切にしようという思

いが、場に満ちています。そんな中で沖縄民謡を聞いていただき、とても素晴らしいひと時を一緒に過ごすことができました。慰問に行って、反対に元気を貰ったことに感動して、重信さんへの手紙でそのことを報告しました。重信さんは返信に、“西ノ京心身障害者の里訪ね慰問の我ら励まされる午後”という歌を詠んで下さいました。

今年もやはり、素晴らしいひと時を過ごし、いっぱい元気を貰って帰りました。けれども、私は思います。西ノ京のこの施設の人たちと、私たちは一緒に生きていると言えるのだろうか。同じこの時を、同じ日本で、それも、ごく近いところで生きています。が、去年、初めて訪れるまでは知りませんでした。知らないということは、いないのと同じ。このような施設を隔離して、閉じ込めて、私たちの社会があるのではないか。それで一緒に生きていると言えるのだろうか。一緒に生きたいと私は切に願います。一緒に生きずに私は生きることはできません。どうすれば一緒に生きることができるのでしょうか…。

「さわさわ」の旗には、たくさんの手が描かれています。たくさんの手が、一緒に集まり、上に向け突き上げられ、訴え、呼びかけています。それは、どれほどいろいろなひとたちの手であることでしょうか。その中に、西の京の施設で私が会った人たちの手があることを忘れずにいたいと私は思っています。

10・19円山公園には今年もきっと、千人を超える人たちが集まるに違いありません。その会場の一面に「さわさわ」の旗が立ち、みなさんをお迎えます。会員の方、そうでない方、誰方でも大歓迎です。どうか遠慮なさらずに、旗のところへ席を取ってお座りください。そして、より交流が深まり、“一緒に生きている”ことを実感したいです。そこから、“一緒に生きる”ための、新たな元気を一杯貰えることを私は願っています。

できたての「さわさわ」の旗は円山の風を孕んで人々を待つ
円山に「さわさわ」の旗立つが見ゆ旗見る人と見られる旗と

私の京都・大阪物語（5）

重信房子

前回の私の京都・大阪物語（4）の中の〈同志社への襲撃〉のところに事実の違いを読者の方から指摘されました。同志社に襲撃してきたのは、戦旗派だったそうです。「襲撃隊が東京から行く」と、情報を知らせてくれたのは、叛旗派の人でしたが、襲撃してきたのは違っていました。当時、襲撃情報を知らせてくれた“恩人”にあたる叛旗派を、攻撃者として記述してしまいました。お詫びして訂正します。また、いろいろな方々から、お便りをいただき、なぜ襲撃に来たのかも知りました。一部の赤軍派は、赤軍派に来なかった、ブントのかつての仲間に対して、暴力を振るったそうです。そのためのSOSで、東京から反撃が組織されたようです。赤軍派もまた、反撃した方も、そんなことをしていたから人々の支持を失ったのだと反省をこめたお便りもいただきました。反省！です。

<木曜会の友人たち>

「同志社襲撃事件」に前後して、数人のグループですが、「木曜会」というのができました。この人たちは、京大闘争や赤軍派の7・6事件などで展望がないと、活動をやめていた、気の良い京大の友人たちです。この友人たちと知り合ったきっかけは、やはり東京にいた関西出身のTさんが書いてくれた20人ほどのリストの中のKさんがきっかけです。電話をしてTさんからお名前を伺っていること、協力してほしいことなど話し、百万遍の学士堂で待ち合わせました。そんなに広くない店に、時間に入っていくとそれらしい人は見当たりません。そこで店の外に出て、道路を隔てた店の見える公衆電話から学士堂にTELして、Kさんを電話口に呼び出してもらいました。

予想外の人物がゆっくりと、電話口へと向かって歩いて行くのが見えました。それで「わかりましたので今もう一度店に行きます」と言って、初の対面をしました。予想外と言ったのは、髪が長めで、Gパンという、当

時の全共闘スタイルではなく、短髪に、学生服だったように記憶しています。ちょっと応援団風でした。挨拶をして今後の協力をお願いしました。まじめで、おもしろい友人たち数人でアイデアを練ってくれました。京大には教授の集まりで、「水曜会」というのがあるそうです。だから、「木曜会」を名乗るというのが、彼らのアイデアです。「教授たちのところをまわって、『木曜会です。寄付をお願いします。』と言ったら、水曜会と間違っ、金出す奴もおるやろ』というのです。冗談かと思ったら、本当にやっていました。勢いに乗って、奥田総長のところまで行った時の、女性秘書にさえぎられた話など、おもしろおかしく話していました。だから本当です。

本当は、彼らは質入れしたり、他の人のものまで質草にしたりして金を集めたり、作っているらしいと、他の人から聞いて、申し訳なく、集金も十分だったので、もう十分だと伝えました。カンパよりも、地のままの彼らの心意気は私の大学時代のサークルの仲間のようなところがあって、励まされました。喫茶店でつい、長話をしてしまいます。「同志社襲撃事件」で逮捕されていた彼らの友人でもあり、私の友人でもあるMさんも釈放されて、「木曜会」の仲間で見えようということになりました。70年春のことです。

普段は、女っ気はないのだそうですが、Mさんがいたせいか、私も花見に誘ってくれました。山科の下宿のすぐ脇に、見事な桜が満開でした。風に舞う花びらの向こうには有名な天皇陵だそうで、緑が続いて、いい所だなあと感激しました。当時は花見など忘れたような日々だったので、あの桜の美しさは今も焼きついています。スキヤキパーティーだったか、肉や焼酎などみんなで持ち込んで、莫蔭を敷いて、花の下で飲み、語り合いました。男同士で、こうして飲むのは、楽しい面もあるけど、「いやあー、ただ女性にもてないだけだよ」などと、まじめなのか、冗談なのか笑わせます。今も思い出すKさんの談には、にんまりしてしまいます。（私もなんで、そんなことを覚えているのか、そんな不真面目なこと書くな！と、批判されそうな話ですけれど。）

Kさんいわく、女性を誘ったことがあるとのことでした。でもうまくい

かなかったそうです。四条河原町の雨上がり、傘持って長靴姿で、「ねえちゃん、茶飲まん？」と、片っ端から声をかけたのにアカンかったとのこと。「あのう、もう二度目なんですけど。さっきお断りしました！」と言われてしてもたと頭かきつつ話して、みんな大笑いしたものです。もちろん、京大のブントの歴史など、まじめな話も聞きました。ことに、京大から赤軍派に行った人たちの大学時代の行状などを、おもしろおかしく語っていました。それらも大笑いした話が多かったのですが、不正確もあるので省略します。「この焼酎はいい。安いのに頭痛くならない、頭に来ないよ」と言いながら、みんな夜遅くまで飲み明かしました。

次の朝、桜吹雪の舞う中を、そこから遠くない天皇陵に行ってみたく、東京から来た私が言うので、つきあってくれて散歩しました。宮内庁が古墳の発掘調査を拒んでいるのは、考古学の探求を遅らせているとか、いや、掘ったら、どこも、何々天皇陵と言っても違うてらしいからだ、などと話をしながら、緑の小道を歩きました。「おい、ちょっと待て。あの焼酎、頭に来んかったけど足にきたわ。」とKさん。振り返ると、道の草の上に、ごろんと寝転んでしまいました。何か、サムライというか、落ち武者のような友人たちでした。(そう言えば、そのうちの一人のMさんは、いつも、「おぬし」とか、「うーん、おぬし、なかなかやるな」などと口癖でした。変わったおもしろい人たちでした。)

7・6事件のあと、初めて関西に来て、桃大の楽しい人々(Oさんや、Kさん、Nさん、Aさんや多くの人)と出会い、その後、同志社では数えきれないほどの友人たちができました。Bちゃん、Sさん、Tさんら素敵な女性たちとも楽しく交友しました。(その後、同志社に一人で私が行き始めたころ、「ねえ、東京なら重信さんという人知ってる？その人はシースルーのドレス着こなして、男なんて顎で使うんだってよ!」と、聞かれたことがあります。当時、私は違う名前前で登場していたため、目の前の普通の私を、噂の尾ひれの私と同一人物とは思わなかったのでしょうか。こっちがびっくりでした。)

同志社では、当時、私は知りませんでしたが、赤軍派と関地区とかの矛

盾もあったようです。それが、襲撃事件になったと、このごろ「さわさわ」の友人たちからいろいろ聞きました。でも事情はよくわかっていないせいか、楽しく、おもしろく正義の実現という感じで、たくさんの活動家と飽きずに語りあったものです。同志社の友人たちのあとに京大の友人たち、阪大、市大、関大、龍谷や高校生たち、白樺や、木曜会や、おもしろい人々とも出会いました。唐十郎の京大公演に参加して素裸になって「プレイボーイ」とかの記事になったと、ブントで顰蹙を買った人も、賭け事ばかりしていたNさんも、飲んでばかりの人もいました。でも、みなまじめにこれまでの闘い方の限界について考えている人々でした。大学闘争を経て、どう生きるべきか、考えていた時だったのでしょうか。

京大嫌いの京大生、N君はなぜか同志社ばかりに居ついていて、京大風バンカラのブントより、同志社のブントがいいと、都会風おしゃれの青年で、よく京都に行った折には助けてくれました。N君は土地の人で、商売をやっている自宅に立ち寄ると、優しくな母親に、「息子はどうですか？」などと聞かれて、「とってもよく勉強されているなと思います。」などと冷や汗で答えたものです。多くの数えきれない人々の、その情景があれこれ浮かびます。迷惑ばかりかけた友人たちにこの場を借りて、お詫びとお礼を伝えます。

また、そのころは、京都の飲み屋にも、多く出役しました。リラ亭だけでなく、友人たちには、それぞれ、行きつけの店があったりする人もいて、ついて行ったのでしょうか。木屋町のところだったか「梅ぼし」とか、北白川の「本蔵」とか。「梅ぼし」は、小さな店で、若いおかみと、なぜか理由は思い出せませんが、仲良くなって、彼女の家にも泊まりに行っていました。夜、店を閉めて着物の彼女と下駄を心地よく鳴らしながら、黒々とした道を歩いたものです。お互いのプライベートも語り合い、お店手伝ってと言われたりしました。この「梅ぼし」には、京大の教授がよく来ていたようです。なぜだったか、高橋和己が気の毒だと、涙ぐんでいたおかみを思い出します。

また、その店で、変な京大の先生と喧嘩になった事もあります。「俺を誰

だと思ってるんだ！」と威張っている男で、「誰とも思っちゃいません。ただの酒飲みの酔っ払いじゃないか！」とやりあったものです。後で、京大の教授の何とか、(名前忘れた、〇〇ケン?かなんか、ちぢめた名だった)だと言っていました。飲んで威張るのでこちらもなまいきで、やり返していました。

「本蔵」のおばさんも、あっさりとした良い感じの、学生思いの人でした。「東京の人ね」と話でも意気投合しました。客の学生に対して、「あんたはもうダメ。お酒は出しません。これ以上飲んでどうするの！」と売り手なのに、相手を息子のようにたしなめる人でした。その分学生たちも気軽に来ていたのでしょう。

京都に住み着いたわけではないので、党内矛盾や生活の苦勞を知らずに走り回り、数えきれない思い出が甦ってきます。こうして仲間たちと、東京の大学仲間と同じように親しくなっていた前後、東京から電話で、「塩見さんが逮捕された！」という連絡が入りました。救援弁護士費用を作ってくれというので、ちょうど、大阪ABC放送の番組シナリオを書いていた友人に大金をカンパしてもらって、東京へと戻りました。

<よど号ハイジャックと弾圧>

東京に戻って塩見さんや昔からの仲間のMさんの救援、公判などの準備をしました。そのころ、4月1日に、日比谷野音で、赤軍派の革命戦線の大衆政治集会を予定していました。赤軍派の中核では、塩見さんが逮捕された前後に、これまでの組織を再編して、「世界委員会」と「日本委員会」に分けたという話をTさんから聞いていたのは、よど号事件の前日でした。

Tさんは日本委員会のキャップで、私も日本委員会のメンバーになっているとのことでした。世界委員会は、国際党派闘争の実現部隊で、日本委員会には、一切知らせず、分離した独自の活動体系なのだそうです。

3月30日、「よど号ハイジャック事件」が発生しました。Tさんらの前日の話から、世界委員会というのは、この部隊だとわかりました。

後に知ったのですが、もう少し前に作戦計画が一度中止になったとのことでした。赤軍派の当時の非科学的な決意主義がよく出ているのですが、

予行演習は、飛行機に乗ってみることをせず、どこかの大学で、机と椅子を並べてやった程度で、飛行機の搭乗条件すら知らなかったそうです。二組に分かれて搭乗する計画だったのに、一回失敗したのは小西組が遅れたためのような感じでした。電車に飛び乗る感覚で、ぎりぎりに行ったら手続きが終っていて乗れず、田宮組の片方の組だけ福岡に着いたとのことでした。後になって、あ、そのころ、緊急の金の必要があったのは、救援弁護士費用ではなく、それかな?などと思ったものです。

でも、30日は「よど号」に全員が乗れて、ハイジャックが始まりました。名古屋上空でハイジャックし、福岡から北朝鮮ではなく、韓国軍事政権下の、金浦空港に着陸させられました。厳しい対決が続き、膠着状態になりました。その最中、都公安委員会からだったと思いますが、4月1日に予定している赤軍派の、日比谷野音の政治集会の許可を取り消されました。これは政治集会です。憲法に保障された思想・信条の自由に対する弾圧だと、救援連絡センターを中心に、抗議しましたが、有効な反撃は出来ませんでした。こちらが不法にでると、権力も輪をかけた不法で来ると、しみじみ、その時、実感しました。

まだ金浦空港で闘争が続いている30日か31日、中止命令の抗議対策のため、話し合いに行くと、日本委員会のリーダーたちは、テレビにかじりついて、「塩見奪還要求も加えればよかったなあ」とか、「迂回路線だったんちゃうか。金日成と党派闘争してから、毛沢東とやるより、やっぱ中国へ行くべきだったんじゃないか。」などと話しているのには、今更何をと、がっかりしました。結局、4月1日直前に迫った政治集会禁止に対して、対抗策は取れませんでした。「しゃあない」と言うので、集会のために、全国から上京してくる人々を、東大本郷構内とか、他に集結させるなど、バタバタしていました。

国内では政治集会は潰されましたが、日本初のハイジャックは目標通りにピョンヤンに着陸し、「成功裏」に終わりました。今では反省お詫びすべき、非当事者を巻き込んだ闘い方だと思います。でもあの時代はそんな配慮もなく、まっしぐらに闘っていました。当時は私も喝采して嬉しかった

ものです。しかし、以降の弾圧は激しいものになって行きます。

ハイジャック作戦から数日後、人を介して、実行部隊が金浦空港で書いた手紙を手渡されました。乗客の一人が届けてくれたものです。乗客と実行部隊の間に連帯感が生まれ、この若者たちの目標を叶えさせたいという思いに駆られた人も何人かいたそうです。

金浦で書かれた手紙には、日本政府批判と、韓国軍が戦闘機でインターセプトして、「ここはピョンヤン」と、金浦空港へと誘導したことなどが赤裸々に記されていました。まず、この手紙を権力に奪われてはならない。そして、広く、このだまし討ちの事実を明らかにしようという事になりました。日本委員会キャップのTさんと確認して、一部コピーをとり、マスコミ反戦の友人の協力を得て、どこか雑誌に載せることになりました。

私の大学時代の友人に事情説明して、交渉終るまで、奪われたら困るからと、文書を保管してもらいました。権力の厳しい弾圧が猛威を振るう中、友人は、「大丈夫、米びつに入れて隠してあるよ。」と言ったのを思い出します。ありがたかったです。私は交渉を担当しましたが、友人たちが仲介してくれて、どこよりも記事の取り組みが良く、取材費として支払われる条件が良いところを選びました。「よど号 100 人の証言」として、乗客らの証言を載せ、「我々は明日のジョーである」という、出発前に書いてあった文と、金浦空港で書いた

文を、全部特集として載せるということで、「月刊文芸春秋」と話が決まりました。

既にお金も受け取った後だったと思います。しばらくして、文春側から呼び出されました。文春の堤さんという男性でしたが、カンカンに怒っていました。どうも、誰かが、週刊現代だったかに、記事の一部を売り込んで、週刊誌が先に出てしまうというのです。寝耳に水でしたが、とにかく調べてみると、平謝りに謝りました。非組織的な当時の実情を示すものですが、金に困った一部の人が出来てしまったことでした。

闘争が終ってわかったことは、よど号部隊は、何もその後の約束や展望もなく、えいやっ！と、国境を飛び越えて行ってしまったということでした。

た。我々が長征軍あらため世界委員会は、運まかせのように、ピョンヤンに飛んで行ってしまったのです。「よど号作戦」を戦った者たちは、「秋の蜂起には、訓練を終えて戻ってくる」と言っていたようです。「無鉄砲」を勇氣と称賛しながら、日本委員会の方は、何の準備もないままでした。カンパしてくれている友人や、文化人たちは、上り調子に支えてくれましたが、決意で飛び越えてしまったのには、さすがの赤軍派シンパの面々も呆れていました。「スターリニスト」に何されるかわからないじゃないか」という心配半分と、「やった！やった！」という気分がひろがって、赤軍派への、若い層の志願が増えました。でも、こちら側は、権力の側との新しい質の攻防に、見通しをもって対処することはできませんでした。そのうち、次々とリーダーが逮捕され始めました。権力も「よど号」事件で、赤軍派壊滅の弾圧体制を強化しました。あちこちでガサいれ、別件逮捕が広がって行きました。逮捕されたものには、長期拘留の恫喝が続き、逮捕によって、自供も戦線離脱もありました。

<再びの逮捕 70年5月>

私もまた逮捕されました。母の日か、その前の日、ちょうど自宅に戻っていて、母のプレゼントを買いに、バス停にむかいました。私の自宅は町田の都営住宅で、世田谷での食料品店の商売が傾いてから、店を売って借金を返して、私が中学3年のときに引っ越してきていました。当時、何百所帯の新住宅地で抽選に当たった住宅には、新婚夫婦も多く、子供たちは小さい子供が多かったのです。塾に通えない子供も多かったので、集会所を借りて、毎年夏には私が無料で近所の子を集めて、「7・6事件」の前まで楽しく学校を開いていました。中学生が小学6年を小学上級生が、下級生を教えるというシステムをつくり、英語も算数もやりました。生徒は20人から30人くらいです。学校ごっこを小さい時から遊びにしていた私は、その延長のように楽しいものでした。

私は塾の終わりに、子供たちに、「勉強した後、一番やりたいことを叶えてあげる。何がしたい？」と聞くと、子供たちは、「多摩テック」に行きたい！」と口を揃えて言いました。多摩に出来たばかりの遊園地です。夏の

ボーナスをはたいて連れて行ったこともあります。こうした子供の繋がりから、私は近所の人々にとって仲良しでした。赤軍派になって関西に行く年にはもう出来ませんでした、それでも自宅に帰ると、子供たちが宿題を聞きに来たりしていました。そんな仲だったので、近所では初めて私が逮捕された時には驚きましたが、みんな好意的でした。逆に私が気にしているのではないかと、遠まきに気を遣っていたようでした。

でも獄から戻った日、銭湯で私が全然気にせず、珍しい獄中体験をおもしろく語ったので、みな寄ってきて興味津々聞いていました。そのあとは、週刊誌に載った記事を切り抜いたのを持ってきてくれたり、悩みの相談を持ち込む人もいました。ずいぶん牧歌的です。

近所の公安の聞き込みが来れば、私の方にすぐ知らせてくれるし、刑事は張り込みも断られ、100 メーターほど先の、三角広場というところで、私服がいつも車の中に乗って見張っていました。子供たちも探偵気分で「今日は南京豆食べてる」などと偵察しては、私に報告してくれました。

そんな条件なので、いつものように張り込みを横目に見て、300 メーターほど先のバス停に向かいました。バス停で4つ目くらいだったかが、町田の駅です。張り込み中の刑事が、いつもはついて来ないのに、二人ついてきました。バス停に着いたところで恐る恐るという感じで、「あの一、あなたは、重信さんの、お姉さんの方ですか、妹さんの方ですか？」と聞いてきました。「妹だったらどうなの？」と聞くと、「いや、実は逮捕状が出てましてね。」とのこと。「姉です」と逃げる手もあるかなと一瞬思ったのですが、姉が後から外出する予定だったこともあり、また、大したことないという思いもあったのか、逃げられないと思ったのか、覚悟を決めてしまいました。

「私は妹の方よ。じゃあ、この服は姉の借り物で、返したいのでうちについてきてくれる？」と言うと、とつても礼儀よく頷きました。私が自宅に戻るのを、私の5メーターくらい後をついてきます。その間にあれこれ考えつつ自宅に戻り、姉に遠山さんへの連絡を頼んで、到着したパトカーに乗っていく時、ちょうど父も戻ってきました。「また、捕まっちゃった。

今度は長いかもしれない。でも心配しないでね。」父はいつもの穏やかなまま、「行ってこい。心配するな。」と送り出してくれたものです。町田署で待っていると、やっと警視庁公安が駆けつけて来ました。そして、町田署の刑事が、捜査のイロハもわきまえず、私を家に帰し、バッグの中には石鹸、タオル、ハミガキなどしかないのを怒っていました。

この時の罪名は、去年他の別件逮捕でさんざん取り調べられていた、大菩薩峠事件の「殺人予備罪」というものでした。よど号事件を調べるためです。「嫌がらせて何度でも逮捕できる」と豪語していました。この時も菊谷橋署でしたが、デモの時期ではなく、房内はスリと詐欺の罪名の人達で、すぐ仲良くなりました。「今度ここから出たら、右手切っちゃうんだ。」と泣いて話す少し年上の女性がいました。戦災孤児で、盗み癖が取れない、働いて生活できているのに、ふっと、生理の時など魔がさすのだと言っていました。犯罪は結果だけが裁かれ、孤児になった原因は裁かれず不当なものです。

ある時、そのスリの女性が看守が靴のまま房内に上がりこんできたので注意しました。看守は犯罪者にバカにされるかという態度で、「うるさい！」と怒鳴りつけました。それに対して騒然と抗議活動となりました。「私たちは好きでここにいるわけじゃない。でも住みかたとされている。家に土足で上がりこんだも同然」と。抗議に看守は「謝りゃいいんでしょ、謝りゃ！」と言うので、更に大声で、「ごめんですむなら、私たちもこんなところ入っちゃいねえよ！」と一日中大騒動でした。房内で仲良くなって、私が一回目の逮捕、釈放の後、獄で出会った友人と再会できた話をすると、「私たちもやろうよ！」と言うので、「再会作戦」を決めました。70年ではなく、71年の、10・21に新宿コマ劇場の前で待ち合わせました。70年にしなかったのは、一人が絶対行きたいので、一年先にしろと言ったためでした。でも、結局71年、私はアラブに行ってしまう、10月のコマ劇場前には集合出来ませんでしたけど。この時のスリの戦災孤児の話など、体験は女性誌に「獄中記」として資金集めの一環として書きました。当時の取り調べは、何の証拠もなく目一杯拘束して釈放されました。

逮捕されていた間に、刑事たちの話から T さんや H さんら、日本委員会のリーダーたちが、箱根のホテルで逮捕されたことを知りました。「出てみたら赤軍派は何もないぞ！」などと刑事たちに嫌味を言われつつ釈放されました。この時担当刑事が、私が 2000 年に逮捕された後に、検察庁に来ていたそうです。自分は若い彼女に未来があると考えて起訴しなかった。それが外国に行き、事件を起こしたと知る度に、自分が起訴しなかったことは誤りだったかと思ったものだったと、私の様子を尋ねていたらしいです。このまじめな検事は、去年、朝鮮総連の建物の取引で逮捕された緒方検事です。びっくりしました。若くて有能そうな、バリトンの響く検事でしたが。

<国際部へ>

上司の T さんも逮捕されていて、革命活動をやめる気はありませんでしたが、私が必要とされることはないな、また教職からやり直そうかと思いました。先に逮捕されたリーダーで、供述する人も出てきて、やめる人などで救援も大変だと、救援の人の愚痴を聞きました。それに活動の拠点を失ってしまったら困ると、大学にいる下級生たちと連絡を取って、大学に戻ろうか考えていました。私は既に文学部は卒業して、政経学部で学士入学していたからです。また、下級生たちは、研究サークルの執行部中心に、大学党派のやり方が目にあまるのだと苦情を言っていました。赤軍派が地区や軍に行ってしまったので、解放派や ML 派、ブントなどがやりあっているようでした。

私自身はサークル連合を母体にして活動してきたこともあって、その友人が多いのです。党派に対して対案を出してやってみるのを相談に乗ったり、赤軍派の拠点になっている大学夜間部の二つの寮から苦情を聞いたり、大学に一年ぶりに戻りました。

先生になって、長期的な活動のことも考えなければと思いました。釈放から日も経たないそんな 6 月、千葉で会議があると呼ばれました。そこにはかつての上司 D さんが保釈されて戻ってきて、会議を開いたものでした。軍のカードもいました。当初のリーダーは、もう T さん、H さんらも逮

捕され、入れ違いに去年逮捕された D さんが保釈されて、今後の指導は D さんの肩にかかりました。これまでの総括として、「前段階蜂起から、連続蜂起へ」と転換したのが、この会議かその後の会議です。「蜂起の放棄だ！」と批判する人もいました。今ではあまり思い出せませんが、一点集中の蜂起から。ゲリラ戦へ移行したのだらうと思います。

この時には、日米同時蜂起が国際根拠地建設第二弾として、路線化されていました。イメージ的には、日本の霞ヶ関とアメリカのペンタゴンに同時蜂起するというものです。(今、そんな話は正気の沙汰ではないと言われそうですが) どう実現するかは、国際部の仕事となり、国際部をやってほしいとの事でした。既に、「世界委員会」、「日本委員会」という呼称も「実体がない」と取り消されていました。国際部のキャップは W さんでした。いろいろ政治情勢や、ロシア革命のアナロジーよりも、どう現実的に外国に行くのか？を考えた方がいいのではないかと話し合いました。そして、当時キューバ研に活動の場を得て戻っていた、藤本さんとも話し合ったりしました。いろいろな話をし、また当時友人たちに「世界革命運動情報」の資料を借りて読みながら、「日米同時蜂起路線」に欠落があるように思えました。

資本主義、「社会主義国」、第三世界の「三ブロック階級闘争の統合」という三つのブロックのうち、よど号の教訓から、第三世界の階級闘争こそ、連帯の条件があり、また育てるべきではないかと思い、また提案しました。68年の反戦集会もそうでしたが、帝国主義国の革命運動の連帯は、小さいけれど経験もありました。「よど号」で社会主義国にも行きました。今、「日米同時蜂起」の条件を模索するよりも、パレスチナではないか？と思い始めました。ちょうど、パレスチナゲリラのハイジャックや、ゲリラ戦が日本にも伝えられ始めていました。これまでアラブとイスラエルの国家間戦争のように捉えられていた歴史が、少しずつ変わって見えてきました。

当時、パレスチナでも 67 年の第三次中東戦争のアラブ側の敗北を経て、自らの力でパレスチナ解放を成し遂げようと、パレスチナ人民自身の戦いが始まり、それが日本にも聞こえ始めていたのです。そして夏、徐々にヨ

ルダンとパレスチナゲリラとの間の対立が深まり、9月、PFLPの連続ハイジャック闘争、ヨルダンの革命飛行場でのジャンボ機3機の同時爆破と、激しい内戦が続きました。

こうした中でDさん、Wさんに行くべきはパレスチナだと述べました。そして、パレスチナへと準備を進める合意を得ました。日米蜂起のためのアメリカ部隊は、引き続き別に進めて行きました。

この頃、国際部キャンプのWさんは、ある日いなくなりました。日米蜂起の無理な方針に、常識的センスのWさんは戦線離脱を決めたようでした。Wさんがいなくなってから、私はパレスチナの事を提案したのかもしれませんが。Wさんはパレスチナならきっと一緒にやったと思うからです。

<関西生活>

6月の国際部への参加を決めて、7月頃から再びまた関西での生活が広がったようです。関西に行くと、いつでも待っていてくれ、共に行動してくれる仲間がいることは嬉しいことでした。京都では同志社の友人たちが、鴨川沿いにアパートを借りていて、使わせてもらいました。窓を開けると、鴨川の河原が見えて、その手前からアパート真近まで、広々と色とりどりのコスモスが咲いていました。写生したくなる風景でした。

大阪では通天閣近くのNさんの事務所兼自宅を勝手に拠点にして活動していました。会議したり、活動したりして、Nさんらと夜、みなで連れ立って通天閣の下かアーケードの下を通過して、ラーメン屋や、一膳飯屋によく行きました。また阿倍野筋に、活動をやめてジャズ喫茶を手作りしていたMさんのところも、勝手に宿泊所にしていました。その地の人でありMさんから、飛田の遊郭の話聞いて、どんなところか学習したいとMさんと前を通ったことがあります。長い大きな暖簾の下から揃えた膝が見えます。屈むと、同世代の若々しい女性もいて、睨まれてしまいました。

すぐ側に、一品づつおかずを自分で取ってきて、ごはんのみそ汁を食べさせる店がいくつかありました。サバとか、さんまの焼いたものや、関西人はあまり食べない納豆を置いている店も一軒ありました。

厳しい権力の嫌がらせや尾行が続く中でもやれたのは、仲間達がいたか

らです。人間関係を楽しみつつ、国際部の活動に走り回りました。また、国際部ばかりか、相変わらず財政確保は大きな活動でした。白樺の友人たち、木曜会、同志社の仲間たち、他にもたくさんの友人が来ていました。ある時、友人がカンパの新しい人脈の確保に協力してくれると言うので、何人かの友人たちに寄付をお願いしたりして過ごしました。最後だったか、途中だったか、北白川の交差点に程近い「雲助」という小さな飲み屋の裏の民家を訪ねました。これが、奥平さんとの出会いです。

燃える秋市電を幾度かやり過ごし革命戦争語りし我らは



Photo: M.T

自給自足の山里から

縄文百姓 大森昌也

【前書き】

森本さんから、60年代、70年代闘争を経験した経歴を自己紹介する文章を添えてくださいとのFAX届く。今更の、「自己紹介」も照れくさいが、父から子への伝言として、了解ください。

私は18歳の時、6・15樺美智子さん虐殺、16日献花、18～19日国会包囲座り込み、60年安保反対に参加。社会党、共産党への批判、全学連ブントへの共鳴。母の強い要望もあり大学（大阪市大）へ。世の親の一番嫌がる二つのガク連（全学連、全山岳連）に入り、また、市大はアルバイト大学の異名あり、アルバイトとデモと登山に明け暮れ、警察に殴られ怪我、山では死にかける。

1962、6、15樺さん追悼の大阪御堂筋デモ（30余人）には、我が寮友（都風寮）岳友らと参加。先頭を担う。北朝鮮で客死した田宮は下駄履きで参加していた。ああ！！

苦学生の私は、やがて関西ブントの始めた労働運動や、「関西労働者学園」（藤本進治、竹本信弘）に関わる。ビラまきして、大怪我させられたり、学園一期生らの首切り、合理化反対の闘い、私は学生であるが、労働者こそ社会主義の中心担い手であり、そこに、“希望”をもっていた。やがて、国労（JR）大阪の書記に。国労の幹部の、腐敗、墮落もさることながら、合理化などで、下請け、臨時工労働者をかえりみないのがつくり。いつのまにか、下請け、中小企業労働者の闘いに。10人余の首切りを撤回させたこともあった。楽しき闘い。いずれにせよ、「労働組合は革命の学校」の希望は消えた。アメリカのベトナム北爆に抗議し、闘いの中で知り合った仲間と共に大阪梅田新道で毎土曜日座り込み。やがて、職場に、地域に反戦青年委員会。67年、10・8、11・12闘争、68年4・28闘争らへ。国労の青年部らと反戦青年委員会のデモ隊が御堂筋

を埋め尽くすようなことも。

この大衆的高揚を巨大なゼロにならないよう、ゲバラの影響もあって、“軍事を内包する革命党”への意欲。東京に上京し中小企業の闘争を担っていた田宮が、幼い青年学生らと、赤軍派の“軍”の展開に危惧。69年夏に、小さな軍事組織（15人。学生労働者、半々、17歳～27歳）その隊長として楽しき苦戦!!やがて学生が逮捕され、私は全国指名手配書（当時はガリ版刷り）が駆らに。70年夏に、警視庁に逮捕され、兵庫、京都への移送。「太陽の塔」を見て、「ああ、しばらく娑婆とお別れだ」としかし、救援会の活動もあり、年末ぎりぎりには保釈。但し、90万円の保釈金（東京保釈は100万円）に腹が立って…。

母と久し振りにゆっくりも束の間。再度、地区現場に。朝起きたら、事務所のベッドの横に千円札の生活。やがてふと気づくと、「新左翼の腐敗と墮落に抗して闘おう」と大衆ビラを出していた。査問など、若干のトラブルあったが、そこは、この関西で苦楽を共にしてきた同志。やがて、新左翼弁護士差別糾弾の闘いへ。何とか、新左翼を糾し得る革命党建設への思いで、小さな政治組織。弁護士糾弾の闘いは大衆化へ。しかし、権力と癒着したヤクザの日本刀とピストルの前に、またしても敗北。環境、農問題を根底においての苦闘続く。80年初頭、政治組織は自主解散す。

私は、個（ひとり）として、今までの己を投げ出しての闘いを踏まえ、（ネットワーク）どうもこの日本、山国の再生は山村にあると思ひ、過疎化の進む部落に家族で移住。1984年のこと。そこで学んだのは、この崩壊前夜の日本、世界を糾し、建て直すのは、縄文と百姓による村作りから国へ。鎖のように繋がって世界へ。「早く帰ってこい」と言ったら、「帰ったらすぐお前のことを訪ねるよ」と人なつこい田宮の笑顔…。

【本編】

「お前みたいに、水仙ひとつよう花咲かせられん者が、百姓なんかできるもんか」と母親。「やる前から文句ばかり。やるというたらやるんや。」とちかし君。

ここ山村の正月は田畑真っ白の銀世界。そんな中、島根から両親と一緒にやってきた。彼は船乗りしていて、船が神戸に寄ると、わが農場を訪ねていた。昨年暮れ、「12月21日で11年乗っていた船を降りました。島根の山村で、あーす農場を目指します。」と電話が入る。

一人息子が心配な親心が、ヒシヒシと伝わる。私は、「実は、20余年前、お金も経験も知恵も地縁もないこの地で百姓始めた。親や友人から“お前には無理や、やめとけ”と言われた。しかし、百姓への思いが強く、移住。苦労したが、村のお年寄りや、自然の恵みによって、6人の子供も元気に育つ。」と自分の経験を話し、本(註①)を読んでもらったり、ビデオ(註②)を観てもらった。

翌日は、農場を「体験居候」の河野君(昨年8月に来訪し、手も動かないひどいアトピーが一ヶ月で完治)の丁寧な説明の案内で、「お金によらないで、可能な限り循環する農」の実際の様子を見てもらう。あい(18)らとも話をする。

帰り際に、お母さんは「20年前に出会っていたら、私らも百姓やっていた。その頃、田舎の島根に都会から帰った。けど、すぐまた大阪に出る。お金お金に気を遣って生きてきた。改めて、お金に気遣わず、お天道^{おてんとう}さんに気遣っていけばいいことがわかった。春にはゆっくり来ます」とおっしゃる。ちかし君は、「親を連れてきて正解だった」と感想もらす。

前後して、鳥取から、裕子さん(24)が、友人とヒッチハイクで来訪。「春から古民家に住み、百姓やります」とさわやかに言う。四季おりおりやって来て、子供たちと親しい。

また、昨正月来て、ケンタ(28)、げん(25)と炭焼き体験した恵さん(26)から「あーす農場に行ってから、山村で暮らすと決め、ようやく昨年11月に、岩手の古民家を買って移住。彼は山仕事を天職だと張り切っています」と年賀状が届く。

わが農場には、年に300人近い人が「百姓体験居候」する。半日から半年以上の人も。50～60代の人もあるが、8割がたは若者。女性の方が多い。フリーター、アルバイト、ハケン、学生がほとんどで正規の職の者

はごくわずか。

農場には、来場者の「感想ノート」がある。その中から一部紹介すると、「やりたい仕事もなく、会社のため、利益のために働く自信がない。日々環境破壊が進み、どんどん便利になったいく今の世の中にも違和感。自給自足の生活も選択肢のひとつ。たくましいみなさんの生活を体験してみたい(草史)等言う人が少なからずいる。彼は、「土をいじっているだけでも何か新鮮で、地球と会話しているようでいい心地でした。これからの人生でこの5日間(20日間の予定が、体力気力の都合で??)は必ず役に立つと思います」と感想を残す。

「正直、タクシー降りて、びっくり仰天!“ここ、ここに人が住んでいるん?”目の前にひろがる景色にあ然(史滋)。初めてやってきた青年の大方の感想。ネパールの人は、「ここ、国の村と同じ」と言う。50～60代の者は「私ら幼い頃はこうだった」とおっしゃる。その彼は、「5日間いて、ものすごく魂を揺さぶられました」と記す。また、「何もかも初めてのことばかりで、自分の普段の生活を改めて見直しみつめることができました(隆也)、「自分の価値観にあらっと思われる出来事の連続でした(大輔)、「これほど、えっ、ひゃー、すごーいなどなど使った日々は、今までなかった(顕大)、「色々な面でショック。日本にいる気がしないと初め感じました。でも6日間経って、今の日本人は昔の暮らしのよさや大切さを忘れているのだと思います(さやか)、「土に触れることが、こんなに心にやすらぎをもたらすとは知りませんでした(舞)等の感想。

わが農場では、自分たちの食べ物、燃料、電気は自給。鎌・鍬で田んぼ、畑、ニワトリ、豚、パイオ、水力発電の世話をし、いただく。時には、トリを葬って命をいただく。薪を割り、パイオに糞を投入し、カマドで料理。食事は家族みんなで食卓を囲む。家畜のエサも、草刈りし、落葉を拾いつくる。携帯通じず、電話か手紙。

考えてみれば今の日本・都会社会では、想像できない。「面白い生活されていますね」との年賀は、東京で大学教員の英佑さん。

ショックや驚きや魂のゆさぶりがわすれられず(??)、再び来訪したり

他の農場を訪ねたりする。そんななかで、実際に山村に入り、百姓始める者が出てきている。

「大森さんちで居候した人らの中から年に三人も百姓始める者が出るなんてすごい！農高や環境大学出ても百姓なるのはほとんどいない。莫大な金使って！」と近くの耕さんは驚くやら嘆くやら。

金と言えば、「宿泊代も食事代も、さらには駅までの車代^{クルマ代}も取らない。普通の常識なさには呆れる」（ますみ）と言われた。よく、「いくら仕事手伝ってもらっているからと言っても、ほとんど役に立たんやろ。金にならんやろ」「そんなに人がくるんなら民宿やったら、お金になるよ」と言われる。

近くで「農村体験館」をやっている人は、「来訪の都会の人は、ただただ“空気がうまい”“食事がおいしい”と口をパクパクさせるだけ」と苦笑い。

百姓は未来のため働く。金にならないから価値がある。環境アシスト設立したサッカー日本代表岡田監督は、「子供たちに何を残すのか。今（電気）使うため、一万年もなくなる放射性廃棄物残すのとは違う」と言う。縄文の神・魂に通じる。

考古学を学ぶちかし君の姉さんは、「百姓は最も神に近い仕事」と言って、ギリシャに旅立つ。

註①：「自給自足の山里から」（北斗出版）、「六人の子供と山里に生きる」（麦秋社）

註②：ノンフィクション「我ら百姓家族」①～⑥（フジテレビ）、

「あーす農場」

〒669-5238

兵庫県朝来市和田山町朝日767-2

面会記

平良

「獄中記」と言えば大杉栄のそれが有名であるが、「面会記」と言うのはあるにはあるが、あまり聞きなれない。パソコンの検索項目を見ても獄中記が13700項目に対し、面会記は200項目である

アクリル板を隔てた「内」と「外」では、あらゆるものがその位相を異にし、安易に「内」なる気持ちを推測するようなことは許されないからであろう。

以下の拙文は面会記というよりも訪問記というほうが正しいのかもしれない。

2008年2月20日、水曜日。2月20日と言うのに、ポカポカ陽気だ。

東京駅から山手線で日暮里へ、そこから常磐線で北千住まで行き、東武線に乗り換えて一つ目が小菅駅である。健常者なら駅から徒歩で10分足らずの距離にもかかわらず、背骨に8個のボルトを入れた身では15分を要し、東京拘置所に着いた時には、額から汗が出ていた。

11時30分を少し過ぎていたので、面会受付窓口は閉まっていた。右手にある差し入れ窓口はまだ受け付けていたので、持参した文庫本2冊と雑誌1冊、それに切手2500円相当を差し入れる。「差入願」に「入所年月日」とあったので、「分かりませんが・・・」と不明のまま提出。担当官は無言のままパソコンのキーをたたいて書き込む。「では、預かります」と言うだけで「預り証」をくれるわけでもない。すぐ隣の「両全会」という差入業者でランの花を見かけたので、これも差し入れてもらうことにした。

12時30分ちょうどに受付窓口が開かれ、早速「面会申込書」に必要な事項を記入して「面会整理表」をもらう。赤い紙に2階・98と記してある。2階は女性被収容者専用であるらしい。待合室は病院同様、長いすが

20近くあり、全面にはテレビと電光掲示板がある。時間帯によるのかも
しれないが、訪問者は7割が女性でしかも若い女性が多いのは少し意外で
あった。

1時になると電光掲示板にフロアごとに数字が掲示され、同時にアナ
ウンスもされる。一般面会と弁護士面会に別れて次々と掲示されていく。
やがて2階の欄に「98」と掲示されたので、やや緊張しながら検査室に
入る。まず、ロッカーにバッグやコート、携帯電話などを入れ、空港と同
じような金属探知機をくぐった後、狭く長い通路を歩いていくとエレベ
ーターホールに出る。そこから2Fに上がると、出たところに女性刑務官が
おり、整理番号を告げると「3番の部屋」と告げられる。

指定された部屋に入ると、もちろんまだ無人であったが、やがて女性刑
務官とともに彼女が現れる。一瞬、お互い泣き笑いの複雑な顔で見つめあ
い、すぐに40年近くの時間を飛び越え、堰を切ったように同志社時代の
思い出話となる。

こう言うのは誤解が生じるかもしれないが、彼女の顔は憑き物が落ちた
ように爽やかと言うか、慈悲に満ちたまなざしであった。それは京都・広
隆寺の弥勒菩薩のようであった。弥勒菩薩と言うのは単に彼女を美化して
たとえたのではない。私の頭の片隅にこんな話の記憶がかすかに残ってい
る。それは、ドイツの哲学者カール・ヤスパースが戦前日本に来たときに、
この弥勒菩薩を見て「この菩薩の姿こそ人間が達しえる最高の姿である」
と言い、続いて「しかし、こんないい姿、いい顔になれるのは、過ちを犯
した人、罪ある人でなければこうはなれない」と語ったそうである。

もちろん私は彼女が過ちを犯し、罪ある人とは微塵も思っていない。
しかし、少なくとも非合法の手段を選択したことは事実であり、そうであ
るが故に「合法」のもつ欺瞞性や時には権力にとって都合のいいことは「非
合法」さえも看過・黙認・促進している現実社会を彼女は鋭く見抜き、彼
女のその合法・非合法を「透徹」仕切った「慈眼」が私を弥勒菩薩に結び
つけたのである。

彼女が前もって時間延長申請をしてくれていたようだが、あっという間

に10分間は経過した。

彼女が悪い訳ではないのに「ごめんね」と言いながら女性刑務官に促され
て立ち上がり、窓越しにハイタッチをして別れた。

懐かしい会話の中で一言、彼女が「あれよあれよと言う間に、あんなこと
になってしまった」と言う意味合いのことを口にしたが、それが正直なと
ころかもしれない。大きな歴史のうねりの中で、彼女自身が当惑しながら
も選択肢は前進するしかなかった状況があったのであろう。

個人的には、私は「国際根拠地論」が登場した時点で大きな違和感を覚
えた。「国際革命戦士として戦え」と言うのであれば理解できるが、「革命
の輸入」はどう考えてもイメージできなかった。また、当時、論争され始
めていたが、綱領（戦略）を欠いた革命論は結局戦術のみを先鋭化させて
いかざるを得ない宿命であったのかもしれない。いずれにしても戦列を離
れた私にはそれを語る資格はない。

しかしながら、そんなことはともかく、死と隣り合わせの現実の中で、
また実際、多くの同志を失う中で、彼女が生き抜いてきたことは、生きて
なすべき天命があるのに違いない。

帰路、小菅駅のプラットフォームから見た東京拘置所は醜悪なぐらい異
様にデカかった。彼女が自由の身となるまで面会は継続したい。
それは、私自身の免罪符としてではなく、例え10分間という限られた面
会時間であっても、「同時間を生きた人間と話すことの安心」と彼女が言っ
た言葉に答えることが出来れば本望だからである。

小菅駅から少し行ったところに小菅万葉公園がある。2月には彼岸桜の
つぼみさえ固かった公園の木々も、6月の今はガマズミと言う低木の小さ
な白い花が咲き誇っている。

2008・6・20 / 平良 記

パレスチナと世界の現在 (2)

重信メイ インタビュー

H=原啓介 M=重信メイ

H: 2番目の質問ですが、今、そういう中でアメリカ大統領選をやっていますよね、例えば民主党が政権を取ると、アメリカでね。どう政策が変わると思いますか？

M: あの・・・、外交政策はアメリカは、特に中東に関してはそう変わらないと。多分、一つ言いますと、仮にこれが民主党になったら2人しかいないですよ、候補は。

H: オバマと・・・クリントンですね。

M: クリントンですよ。クリントンはもう既に如何に自分が変わるかっていうのを示してきてるから、その中東問題に関して。要は政治的に自分に有利な形に自分の意見をコロコロ変えてる人間だから、

H: それってオポチュニストだね。

M: オポチュニストだから、例えばこれまでは自分が、ファーストレディだった時、クリントン前大統領の奥さんだった時は、一度このパレスチナ問題に関して、イスラエルのことを批判して、パレスチナとイスラエルに2国家の可能性の話を1回したことあるんですよ。でこれは、でもアメリカ自身、アメリカ政府がまだしたことない・・・

H: まだ踏み出してないってことね

M: やっぱりアメリカの大統領はまだ言ったこと、言ってなかった。

H: 公式には、言ってないという

M: 公式には言ったことなかった時に、それを言ってしまったら、

ユダヤ・ロビーにかなりパッシングされて、

そのユダヤ・ロビーのパッシングがあったことによって、もうコロッと変わって、今ではユダヤ・ロビーの宣伝PRの人の一番、第一人者になってしまって、今では著名なイスラエル・ロビーの団体の資金集めとかイベントする時に出てくるようになった。

H: 選挙運動とかのこと？

M: 選挙じゃなくて、その団体の資金集めの時に、ヒラリー・クリントンはいつでもス

ピーカーとして出てくるような人間になったんですよ。だから、クリントンがなったら、もうもちろん・・・そう・・・そのアメリカの立場が変わる、中東に対して変わるとは思わない。一方、今度、オバマ氏になったら、っていうことだけど、オバマ氏は質はいいと、カリフォルニアで、今まではアメリカに居るアラブ・ロビー、アラブ人コミュニティ、ロビーっていうか、アラブ人コミュニティとは、まあ理解者というか、いろいろと、例えばエドワード・サイードの紹介のためにディナーとかに出たりとか、そういうこともしてた時があるんですよ。でも今のアラブ人のコミュニティは文句を言っている。アメリカ大統領選に出た時から、どんどん立場が変わっていった。あるいはイスラエルに対しても、口調が変わっていったということを言ってるってことは、やっぱり私は、アメリカ大統領は誰になったとしても、イスラエルにとって有利な大統領であるには違いないと思うんですよ。

H: ユダヤ・ロビーから離れられない・・・

M: ユダヤ・ロビーの力はやっぱり強いので、イスラエル寄り・・・

H: 相当強いのか？

M: ええ、もちろんそれはすごい強い。何故なら例えば選挙、

H: まあ、もともと金融資本だしね。

M: もちろんそうですけど、資金集めが桁外れに凄いですね。で、それで資金の使い方、こういう特に今みたいな大統領選とかいろいろ他の選挙のキャンペーンの時もそうだけど、応援してる、支持してる人に対しての、資金をカンパするだけじゃなくて、反対意見を言う人潰しの為にも資金を使う。そのぐらい資金を潤沢に使う・・・

H: ネガティブ・キャンペーンとかいう宣伝にも？

M: ネガティブ・キャンペーンにも使うぐらいなものだから、本当にアメリカの政治家は結構恐れている存在なんで、そういう意味でも、何かを起こすようなアメリカの大統領っていうのはそういないと思う。まあ、ちょっと変わるとしたら、あまりにも公に、何をイスラエルがしても、例えばイスラエルがレバノンをあそこまで攻撃しても、応援しないとか、それぐらいのレベルだと思うんですよ。多分ちょっときつく止めるように言うとか、でも残念ながらオバマ氏はこの前のレバノンに対してのイスラエル攻撃の時も、イスラエル支持を発言しているので、既に。だから、今回別にどう誰がなっても、あんまり変わらないというふうには私は見えていますね。

H: 白か黒かということではないということだね。それはね。

M: ないですね、それは全然。アメリカではイスラエルに対して、ちゃんとした物言いができたのは、多分ケネディ以来ないです。ケネディの時、唯一アメリカがイスラエルが核を持つようとしていることを知って、その時は、当時はフランスからその核の・・・

H: イスラエルが買うの？

M: 買うんじゃないなくて、核の実験の情報とか、そういうものを、研究情報をフランスから得ていたんですね、イスラエルが。で、当時はアメリカは必ずしもイスラエルにそこまで、持って欲しいと思ってなかったと思うんだけど、その時にケネディが唯一、そのアメリカとしてイスラエルが核を持つのをあんまりよくないと思うというようなことを側近とか、あるいは発言をしていることは最後なんです。アメリカとしてイスラエルに対してそういう・・・本当にイスラエルの・・・存在・・・イスラエルからしたら存在に厳しいようなことを言うことってというのは。あとは普通に例えば、止めたほうがいいんじゃないかとか、そういうすごい甘い批判ぐらいだけで、核を・・・

H: 核の廃絶主張ぐらいだね。

M: 核をなくすとか、核を持つてはいけないとか、そういうことは・・・言う人もそれからでてこないし、陰謀説を言ってしまうと、ケネディはそういうこともあって・・・

H: 殺されたと・・・。

M: 殺される・・・道を作ってしまったんじゃないかという、話もあるんだけどもちろんそれは陰謀説なので、

裏を取った訳じゃないので言わないけれど・・・。

H: 最後にややこしい問題になるけれど、日本ももうすぐ下手すると自民党の長い政権がね、分解というか溶解していったね、それで結局、例えば僕らみたいな人間にしてみれば、どちらも保守でしょ？民主党も。で選択肢がなくなるといことなんだね。基本的に。前、メイちゃんが僕に「選挙は早川さん、行かなきゃ行けませんよ。」みたいなを言ってたけど。別段、俺はむくれて行ってないわけじゃないんだけど、基本的に両方保守なら、じゃあどっちへという話だと、もう日本のその今のね、問題を立ててる政治のレベルがものすごく低いわけですね。でも俺達はこんな(末期にしまったんだけど?) 基本的には若い頃はめちゃめちゃ政治の意識が強いわけでしょ。で今、こんな年になってね、別段今でも意識は低くはないんだけど、実際のリアルポリティックス

性の関わり方っていうのはね、例えばこういう中東問題とかね、あるいはハマス、ヒズボラがやっているとかな、逆に反イスラエルの運動にカンパをするとかな、どういふスタンスがいいと思う？今後。

M: 私はもちろんそれはそっちで、外交的な面というか民衆外交というのはずっと続くべきだと思うんですね。

H: 民衆外交・・・。

M: うん・・・。今までの民衆外交のおかげで今までいろんな国々で親日的な国民がいっぱいあると思うんで、それはそれで、別の話だと思います。

H: 俺は、形のある協力に継続すべきだと思うんだけど。

M: でもそれは別に政治活動と違って、人間として外、他の人間、他の国民との外交を持つ、あるいは関係を持つという範囲であって、日本人としての政治の関わりっていうのはいくら滅亡的であったとしても、いくら例えば自分から見て、民主と自民だと別に違いはないように見えたとしても、でも、2つ手段はあると思うんですよ。

H: 2つ？

M: 一つは、じゃあ本当に自分が応援するような意見を言っているところがあるんだしたら、いくらそこが弱くても最後まで応援する。それを各人間がやっていると絶対そこまで弱いはずがないんです。ただみんな、自分の票とか自分の票が・・・死ぬ票になって欲しくないからとりあえず違うところに入れてしまうっていうのがあるじゃないですか。そうすると結局はどんどん自分もその自分が賛成しない2つの組織を作る方向に助けて・・・手伝うっておっしゃってるようなものなので、いくら自分がそんな応援してない・・・応援しているけれども弱いついていう組織があったとしても、その弱い組織を最後まで応援するっていうのが一つ。もう一つは、例えば今、日本にとって重要だと思うようなポイントが、この2つの組織の中の1つが自分の意見と一致するような意見を持っているのであれば、そしたら、別に全体のイデオロギーとか全体のポリシーとか政策とかは、そこまで一致しなかったとしても、一番今、日本にとって大事だと思っているところで一致しているんだしたら、まあしょうがないけど4年とかぐらいのものなんだから、とりあえずはそっち入れる。とにかく私はよく言うけれども、この選挙っていうのが唯一、今の日本では国民の意見が反映される場なんだったり、チャンスなんでそれは逃してはいけない、と。だからもう最後まで熱心に弱い組織でも応援するか、それ

か・・・

H：選挙行ってるの？

M：行ってます。もう、一つもミスしないです。それかもう一つは、やっぱり自分が一番大事だと思うポリシーがあれば、それを支持している組織、勝ちつつある組織に入れる。別に他の部分では自分が一致しないことであっても、意見が一致しなくても、そっちをとりあえず応援する。その方法以外はないと思う。それじゃなければいくら何したって変わらないし、いくら（ヌーン？）したって、自分がとにかくできることをやっただって満足ができないという。あとはもう見ているオーディエンスになっちゃうだけなんで、そういうことすることによってとりあえずオーディエンスじゃなくって、ちょっとは関わるようになってくると思うんで、それが多分、一人ひとりがそうすれば違うと思う。今の、でも日本は私もいろんな人の話を聞いていると、やっぱり絶望的に思ってる人が多い。特に中年の人達・・・

H：デスペリトやね。M：デスペリトだし、どうしようもないっていうような状況を感じてる人が多いんだけど、どうしようもないことは絶対にはないんです。

(つづく)

(発行者のご好意により、「BOKUDEN」創刊号より転載させていただきました。なお、この、重信メイ：インタビュー(2)は、前・4号掲載の予告をしていますが、編集上の都合により、本5号掲載となりました。あしからず御了承くださいますよう。次号は、完結編(3)をお届けいたします。)

書は現在、広島刑務所で受刑中の、Y・Tさんが、重信房子さんの短歌作品中、九首選んで、書作品として、半紙に書いてくださいました。)

秋晴れの
ふどう畑と
アーモンドアラブの白さを
恋する
夜更けよ

短歌で遊ぼう…(4)…

さわ女と「寄っといで短歌」

～今回の題詠は「肉親」です。～

今回もみなさんの創作意欲と情熱に刺激を受けて、感想を述べさせていただきます。「はじめに」と言いながら、皆さん、心晴を一首にするのが、なるほど…と、学ばせてもらっています。秋の気配の中、一つ一つの歌や句を独房で、夜、声に出して鑑賞すると、皆さんの情熱が伝わります。

今回、重信さんが入院されたと聞きました。短歌もいただいておりませんが、健康の回復を祈ります。

影法師 (岐阜県)

「さわさわ」では、毎回、私のような者の作品を取り上げていただき、心から感謝しております。

さわ女さんのメッセージ楽しく拝見させていただきました。いつもありがとうございます。また、「さわさわ」4号冒頭で、すべての結果が今年中に出るとのこと、しかし、その見通しは「ラクダが針の穴を通る」ほど難しいと懸念されていますが、私たち支援者一同は、必ず勝てるものと信じて応援しておりますので、どうか今日まで闘って来た御自分を信じて頑張ってください。いつも私は、さわ女さんの御健闘をお祈り申し上げます。 (題詠(1)～(3))

- (1) 気がつけば親の意見に背を向けて太郎と呼ばれる刑務所暮らし
- (2) 肉親に縁を切られて早や五年不孝詫びても届く便りなし
- (3) 母来ると面会の度に詫びる友甘えて来いと背中押す我
- (4) 降る雨に思いを込めて鶴折れば夢も叶うかひと時楽し
- (5) やがて来る自由になれた暁は一度は逢いたし夢もふくらむ

[俳句]

- (1) 柿熟れて策一杯の笑顔かな
- (2) 十五夜を雲に隠して秋の風
- (3) 蝸や借金取りの声がする
- (4) 秋の夜山の向こうに囃子かな
- (5) ガソリン税気温とともに上昇中
- (6) 落蟬を両手に包み寺の鐘

- (7) 立秋や網戸に縋りわめく蝉 (8) 五輪の夜古代絵巻のスタジアム
 (9) 北京の夜花火で飾るお家芸 (10) 電線に雀の巣立ちや猫走る

いつも心のこもったゆまし、ありがたうございます。今回の短歌五首とも、肉親との絆を恋うる思いが胸に迫ります。そしてまた、影唄師さんと合わせ鐘のように影唄師さんの肉親が腰を切ろうと決断するに到る辛い、愛情と怒りと悲しみの葛藤もまた、影唄師さんの歌から透けて見える気がします。(2)の歌には影唄師さんの愛の気持ちがまだ届いていない辛さをうたっていて切ないですね。でもきっと肉親の胸を様々な想いでいると思います。(5)の歌は夢心が届いたらきっと実現すると思いますよ。俳句は(1)がいいですね。短歌で詠んだ肉親と一緒にいる切ない頃の影唄師さんの顔を想像しました。それに(6)が好きです。薄さが両手に抱きあげられて包まれているようです。

M. M (岐阜刑)

いつもパンフを送っていただきましてありがとうございます。毎回拙い俳句を投稿させていただき幸甚です。「さわさわ」が大変お役に立っています。

- (1) グランドに汗ならびにけり青い空
 (2) まどろみに肩かす格子曼珠沙華
 (3) 喜びは手に持つ重み三が日 (4) 食器口風入れひとり棒アイス
 (5) 雲の峰伊吹のなだりに立ち上がる

鮮やかに一時の夏が眼に浮かぶようです。(1)の句は情景のポイント「汗ならびにけり」のところを、工夫できないかなと、「汗ならびおり」「汗ならびたり」とか試してみましたが、うまくいきません。前号でも、M・Mさんの一句をシグナルのところをさわってみようとして、やっぱりオリジナルがよかったです。(2)もいい句ですね。あまり俳句は自分でつくれない分、感想を難しいですが、私は嬉しくなってきれいな歌だなと感じています。

Y・M (千葉刑)

私は逮捕されて以来 27 年経ちます。平成 16 年から 17 年まで東拘 B 棟 8 階で生活していました。その時、連赤の S さんもおられました。私はそれより以前にも昭和 58 年

まで東拘にいたので懐かしい顔でした。

「さわさわ」4号に載った私の歌はさわ女さんへ作ったものです。何しろ東拘の新しい棟は、本当に隔離された世界です。心の中だけは自由に！と願ったものです。今回は、一点、一点、心で色々と思いながら作ったものです。次は会員の方も思いながら作りませう。何しろ短歌は無縁の者ですから、かなり大変なのです。今も髪の毛が何本か抜けた気がします。

- (1) 母と我暮らす歳月逆転しせめて間に合え最後の日だけ
 (2) 日本にも魔女狩りがあると驚きて何故母娘引き裂かれるか

御自身の大変なところ、こちらにまで配慮くださってありがとうございます。影唄師さんの(5)とも共感しますが、(1)は「最後の日だけいいから」と、母と暮らしたい思いが率直に詠まれています。でもきっと、Y・Mさんと同じかそれ以上に、母上は辛いでしょうね。この歌を母上に送ってあげたらいいなあと思いつつ読みました(2)は夢帯の想いが届きます。ありがとうございます。。

ごめんねジロー

暑いですね。地球温暖化なんて生易しいものじゃないですね。日中はとても畑には出られず、洗濯と昼寝と読書で過ごしています。

当方、妻が病床に臥し、私めがおさんどんはじめ、家事一切をする羽目と相なり、しつちやかめっちゃかの日々。ようやく慣れてきて、老老介護の覚悟も定まり、何とか元気にやっております。

- (1) 妻倒れ予期せぬままにわれ介護平穩無事は所詮無縁か
 (2) 面白いけど進まずもどかしい暑読・夜読の『寒村自伝』

おかげさまで、妻の調子も随分とよくなり、身の回りのことは自分でできるまでに回復しました。やれやれです。

『寒村自伝』に続き、葉山嘉樹の一連の作品を読んでいます。一等、衝撃を受けたのが、『セメント樽の中の手紙』。ほんの短い小説ですが、忘れかけていた初心、私の原点を想起させました。許せないこと、許してはならないことが、この世にはある。なぜ？そして何をなすべきか？…。

- (3) 金はなし知恵も若さもなければ初心得るまじ生きてる限り

大変な事情を前向きに乗り越えている様子、書との絆、行き方への主体性放だと
思います。ジローさんの歌はいつも行き方を感じさせてくれます。ひるます、「してん
」[寧村自伝]を読み、次の鷺山麗樹の作品。私も読みたくありません。(1)はブゼント
字を廻るジローさんを想像してしまいます。おゆれあいの全貌を祈ります。(3)は大
胆不敵！ジローさんの開き書きが活写されて、大いに気に入りました。言うこと
なし！ですよね。短歌より人柄に注目してしまいますよ。

香り女

- (1) 図々しく前向きにあれ夏盛り便りの中でほおずきはじける
- (2) 青年の非業の最期なげごと夜気にゆれおりさぎ草ひとむら
- (3) 八朔の祭りのあとに星ひとつ悔いを残して夏終るらし
- (4) 日本に来ていちばん幸せやったと旅行バス降りてアフガーニ一十六歳
- (5) 毎週の同じ時間に涙出るドラマの中に我と君いる

香り女さんはすい分自然に作るようになりましたね。(2)のさき草が塵に咲いて
いるとのこと、夜に揺れるさき草が眼に浮かびます。アフガンの青年を詠んだもの
でしょう。“アフガンで倒れし青年弔いて夜気に揺れおりさき草ひとむら”アモ
いいですね。(4)はリアリティがそのまま歌に切りとってなかなかいい！こんな切り
とり方できる人なので、街に出てこんな感じの歌をもっと詠んでください！(5)はう
まいです。きっちりとまわって、ぐっと、歌に唄れた様子がわかります。私も刺
刺受けます。

平良

- (1) 差し入れの蘭の一輪ささやかな想い届けと願う心よ
- (2) 面会に行ったはずの私の方が元気をもらい東武線で苦笑

いつもおもしろいありがとうございます。おまされているのはこちらこそですよ。9月、
面会の折、彼岸の花は必ず、彼岸の時に着開になる不思議を話してくれました。去
年、香り女さんが公判席上で哀された折、開け原のあたりの彼岸花の美しさを
知らせてくれたので(この時生まれた夢遊歌をさわ女に夢遊歌(1)に増載しま
す。)、[彼岸花咲いていましたか?]と私が聞いたためです。昔からの優しさが、平

良さんの歌になってますね。其節の旧友の「デジカメ歌人」の話が出ました。面会か
ら戻に戻ったら、ちょうど、話題の歌人のすごい歌が届いていました。羨せたり怒る
かなあ…。平良さんに免じて許してくれるでしょうか。“ヒリヒリとからだを駆ける舞
臺あり尊嚴の尊尊現実化する死”

東浦

- (1) 水茄子や泉州の風海の蒼

東浦さんの初句です。水茄子がおいしいという話とともに、海の風景を詠いつ
つ、一句です。なかなかやるなあという初句。次々とお願ひします。まなしりを決し
ていたあの昔。昔から考えたら想像できないけれど、今の東浦さんは、絶対いい句
を作れると思います。ぜひ次はもっと俳句も短歌の挑戦を！

清山

- (1) 窓もなき獄舎に潜む死刑囚誰にも忘れられているのか
- (2) 迫り来る鹹首の夢を見るや君日々の命のいつまでか
- (3) 二十年無期懲役死刑囚四十年前に我らがなした罪
- (4) 幾人がまだ刑務所で呻吟するや彼らの本をカフェで読むのみ

坂口さんの「常しへの聲」を読んで、改めて、死を怯える自分と同じ人達だと強烈
に自覚したことが、初めて短歌を作る動機になったとのこと。かつて闘った者と
して、姪一重の中にいたものとして、家中の人々に深い思いを寄せる清山さんの優
しさ、心が伝わります。(4)は過去を越えた今の距離を望みをもって見る眼差しが
あります。清山さんは、情感があるので、いくつか歌をつくってあげれば、すごい歌が
舞けて、生まれる予感がしますよ。つづけてください。

哲蕉 題詠

- (1) 初孫はどこにでもある爺孫の関係にあらずそっと避けおろ
- (2) 初孫の慣れさ加減を先方の親と比べるなそのうち慣れる
- (3) 二歳前の孫にせつせとあれが爺といいふくめる妻と娘
- (4) 我を見る小さき孫の瞳には我は何者と写りしかな

(5) ひぐらしの鳴き声聞く頃墓参り曾祖母祖父祖母と孫も手を合わせる
 帰れましたね！前回は、手違いで、載せるつもりでないのに載ったと、彼らしく早速、短歌のカリチャースクールにはいったのですね。私の歌はいいですねえ。(1)と(2)は理屈と歌の題ですね。(3)は、「～いいみくめている書と箱は」としたら、字が納まっていいですよ。(4)の歌の情景は、とってもよい切り取り方です。いい歌です。工夫すれば、もっとよくなるのでは？(6)もいいですね。家族の絆がえがかれていきます。哲彦産は既に日誌のように大書によみはしめたとのこと。その中でいいのをいくつか紹介させてください。なかなかです。

・短歌とはたずねし講師の四答はみそひと文字であればいいです

・セミの音はこの世の歌響か悲しみか囁が流むまで囁きやまず

(「囁きやまず在り」か「囁き囁きてあり」かと工夫するともっといいですね。

田川晴信 題詠

(1) 待ち受けて医師ボタン押す父死んだと

車を運転しながら浮かんだ句三つ

(2) 窓の外餌を寄こせと猫ひとり (3) 物陰に子を生みし母牙を向け

(4) 若き日の戦語らず父は往く

田川さんは俳句に特化しつつあります。田川さんは大事なことを何気なく吐き、いつもの風儀のままに、非日常を実行する力があります。句もそのキャラクタ一のみまです。 (1)の父の死を、ボタンを押すという行為によって悲しみのおおまさが遊に詠まれています(4)とともに。(3)も、何気なく通り過ぎることを、句にするゆとり方は才能です。なかなかですね。短歌より説明的でないのがはまっているのかも知れません。また、短歌も雑駁を！。

森本忠紀 題詠 (1)～(14)

- (1) 用を足し部屋に香水撒き散らし母はりハビリの先生を待つ
 (2) 無理を言う母たしなめるわが口調ふと気がつけば母に似ており
 (3) 嬉しげにデイの報告する母は学校帰りの子供の姿
 (4) 吾を呼びまた呼ぶ母を愚痴たれば父は笑いてたしなめにけり

- (5) お互いの髪を薄さをあげつらい父と笑える在宅介護
 (6) 器用なところは遂に似ぬままの親子なるらし父の髭を剃る
 (7) 商人の意気なお高し風呂サービス受けて「なんぼ」と問いたる父は
 (8) わが孫の離れ住む故肉親とう言葉ひとときわ強く刻まる
 (9) 「まあいいや」つい出してしまう口癖に頭搔きつつすぎなは笑う
 (10) 不登校乗り越えすぎな早や小二笑えば二本の大きな前歯
 (11) 自分からすぎなはずに「ハイ」と言うそんなに我慢しなくてよいのに
 (12) しらを切る嘘もつくその憎めなさ何となずなの言い訳上手
 (13) わが膝に乗りてなずなの描きし絵のでんでん虫の角の長さよ
 (14) 受難の子を我が家の誇りと胸を張る父親のありテレビにて知る
 (15) 獄中の星野文昭絵画展絵はみな無言我れは饒舌

題詠「肉親」なら「おはじ」の森本さんです。二面親の介護、子育て、そして、その目線から他の家族を見る目の(14)も。(1)は誇り高い母上が浮かびます。(3)も(4)も(5)も、二面親とのいい関係は、笑いも涙も特徴も全部詠んでしまうのは、やはり忠紀さんが歌に唄れているからですね。全部いいですね。(1)と(6)、(10)、(14)が好きです。(6)はとくに光っています。(10)も下の句が生きていい歌です。(7)は並び替えて、「風呂サービス受けて「なんぼ」と問いたる父商人の意気今なお高し」の方が、わかりやすいかと思いました。でも肉親の歌あふれ出てきますね。

原啓介

個人的題詠として・・・『読書』を主題に

- (1) 一日に一冊は読むのだと決意せし夜驟雨優しく
 (2) 窓をうつ大粒の雨何思うヴォルテールの怒りにも似て
 (3) 思想なき宰相去りて暗澹と頁を繰るはルカーチ全集
 (4) もし君の愛が愛として無力なら不幸だと言う経哲草稿
 (5) 文学の責任などと気負いつつ命削りし高橋和巳
 (6) 虚無僧が命削りし文学をただ可哀想と高橋たか子
 (7) 月蝕の高取英に会いし夜我ホテルにて寺山修司
 (8) 甲高い岡野弘彦旋頭歌を歌いし頬が赤く悲しく
 (9) 思案にくれ友の下宿を訪ねせし同じ時刻に逝く高野悦子

- (10) 囚われて歌を詠むひと戦前も戦後も同じ重信房子
 (11) 青春の落日を見た無援のひと優しい声の道浦母都子

読書と出版に深く関わった想いから視野と力量をひろげた原さんの短歌がぐっと冴えています。去年「さわさわ」編集部の義務というか、みんなで、まず作ると決めて、初めて詠んでから、その非凡な抒情の切り口は、短歌に合っていましたよね。このごろぐんとレベルアップですね。今回、思うところあって、「読書」として詠まれた歌は、歴史と人生の自己史が詰まっています、どれもいいです。そのまますべて載せるのがよいと思いました。なお、プロの歌人に添削されたもっとよいものも、両方、私の手元に届きましたが、今回のところ、原さんのオリジナルの方の掲載に賛成です。歌も人脈もひろがりながら、さらなるご活躍を！

波女 題詠

- (1) 父の背にて進軍せる我が無敵の幼年時代
 (2) DNAらせん階段いったりきたり登っているのかおりているのか
 (3) オヤコにおける一句のみうかべる能なき初秋なり

(1)は「自分の力」と信じたものは、又にも全的に保護された力だったのか…と、ようねんしたいを思う、ときっとさせる一首です。(2)はすごい問題提起。「ワタシハシラナイヨ」と歌のあとに添え書きありの大胆発言。(3)もシニカルな叫びに聞こえます。みかけによらず、シニカルな哲学少女のような相貌の歌です。きっと個性的な歌人に成長すると望みます。今回の初作歌にエールを送ります。

さわ女 題詠

- (1) 月見草月見草また月見草父に手引かれて歩みし河原に
 (2) うぬぼれたあの日あの時振り返り詫びたき親は彼岸に在わす
 (3) ゆずらざるわが強情父ゆずり情に弱いは母ゆずりらし
 (4) 我が家の庭虞美人草が乱れ咲く時代を語る姉と妹
 (5) 「山吹を好きだったのよふうちゃんは」二歳の我れを語りし姉は
 (6) 麦わらの赤いリボンをひるがえし吾子が迎えるバグダッドの夏

- (7) 吾子面会旅の計画語りつつ子供時代の笑顔がのぞく
 (8) アフガンに倒れし息子を誇りと言う父の言葉に我が父をみる

さわ女 連想歌

- (1) 彼岸花関が原から美濃まで友と出会いし傍聴の帰路
 森本さんの歌から連想して零れたのが、この歌一首
 (2) わが強情父ゆずりらしこのごろは強き意志持つ吾子も似ており
 父上も厳しい条件にあるのです。家族と共に家で看取られるのが本人には幸せに決まっています。庭の花々、土の臭い、慣れた廊下や畳、家族の声の聞こえる日々。今は、すぎな、なずなちゃんへの教育となっていることでしょうか。共に父上を看護介護する時間を生きることは、それだけで、生きた生命に対する、家族に対する教育となって、大きくなったら、すぎな、なずなちゃんの心の中に蓄積されていきますものね。(森本の手紙に対する返事より)
 (3) 我が父は家族と共に家で看取る父の髭剃りつ覚悟せし夏
 原さんの(4)番目の歌、「若きマルクスの愛を語る抒情に痺れた」と、自註があります。そこどころ、私は逆に、「何よ。何も言っていないじゃないか」と、抒情に痺れなかった…。女中がマルクスの子供を産んだ愛はどうなの?! 愛していたのかと聞きたくなかったためです。もう一度、また、経哲草稿を読んでみようかと思えます。
 (4) 愛を語る経哲草稿その一行わがマルクスの落日となる

以上、さわさわの仲間歌だけでも肉親との絆、和気旨い旨いの愛情、その反対、嫌の切れたままにある苦しみ、病気や死へのいたわり、それそれの違った条件が歌の中でわかります。でもどれもみな共感しているのは「さわさわ」の合のトケらしく、「さわさわ」「一踏であること」を響びとして、絆をかがげないものとして歌っていることです。さらに、歌で絆を深めたいと望みます。

次号6号の題詠は「生」。これは何と来年の歌会始めの題です。「さわさわ」で先取りしちゃいましょう。ん？勝手にいただくのだから、横取りかな？奮って投稿いただきますよう！

【編集後記】表紙の絵は墨象作家・西村俊山さんが重信さんの短歌を墨象作品として表現してくださいました。原画は大きなカラー作品で、『重信房子歌集』から選んで、7作、作っていただきました。西村さんは、ユニークで大胆な、墨象表現で知られ、ふすまから、浴衣、掛け軸、照明器具、封筒や、ハンカチ、その他、小物に到るまで、ありとあらゆる対象に作品を描いておられます。詳しくはホームページをごらんください。

【www.k-next.co.jp】／“縄文百姓”大森昌也さんは、前号で『キューバ訪問記』を寄せてくださった、あいちゃん、れいちゃんのお父さんです。現在、「あーす農場」を主宰しておられますが、その昔、共産主義者同盟（ブント）の活動家として、革命運動に身を捧げる青年でありました。『自給自足の山里から』を、『MK新聞』から転載させていただくに際し、若い頃を回想、革命運動から農業への転機を語っていただきました。／『重信メイ インタビュー』（2）、お待たせしました。前号、4号にお載せできなかったこと、お詫びいたします。次号までの連載です。お楽しみいただきたいと思います。／『訪問記』の平良さん。御自身書いてくださってるように、背骨にボルトが入ったお体で、京都から東京まで、重信さんの面会にずうっと通ってくださっています。お体に十分気をつけられて、これからもよろしく願います。／、東浦さん、清山さん、波女さん、短歌コーナーへの初投稿ありがとうございます。「三人に続け」と、どんどん投稿をお待ちしております。／図書新聞（2885号～2886号）に、重信房子さんへのインタビュー記事「全共闘の魂はアラブを駆け巡った」が掲載されました。聞き手は、「さわさわ」前号掲載「短歌を語る」で、重信さんの短歌の評をしていただいた、小嵐九八郎さんで、お二人の気合が、丁々発止と響き渡るような紙面で、読んで興奮しました。「獄中に九条語り笑む人の日本を愛する思いの深さ」まとめて買っていますので、お入用の方は、編集局までご連絡ください。／次号第6号は、12月刊行の予定です。重信さんへのお便り、投稿、お待ちしております。（森本）

販売は1冊300円です。なるべく年間購読をお願いします。送料込みで、年会費は2000円です。

（郵便振替口座 00920-2-169764 さわさわの会）

連絡先一〒635-0061 大和高田市磯野東町3-27 森本忠紀

Tel/Fax 0745-22-4002 mail : toppinsyan@kpa.biglobe.ne.jp